

上妻隆栄教授最終講義

「毛沢東思想と中国民衆  
——中国の将来をどうみるか——」



学部外の方々，学外の方々，多数お見えになっており，厚くお礼申し上げます。

最終講義ということで本来私の40数年の中国研究の遍歴を総括しなければならないというつもりでしたが，時間も限られておりますので，現在私が到達している見方，現時点でどう思うかということ述べて，責をふさぎたいと思います。

ただ，前置きに一言，言わせてもらえますならば，今，御紹介にありましたように，私の生まれました大正5年というのは，1916年，ロシア10月革命の前の年。その年生まれたことは，私として全然責任のないことであります

が、どんな人でも歴史の制約を受ける。平凡な者ほどそれに引きまわされる。私は文字通り、その後の世界情勢の推移の中、日本の動きに引きまわされて、現在まで来た。そこで、現在こういう考えに達したというように御理解願いたいと思います。

掲げましたテーマは、「中国の将来をどうみるか」ということです。

今、中国は、大きく転換しつつあると一般にみられている。果してそうなのか。新聞などで見ますと、随分現象的で本質を見誤った評論などが、かなり見受けられます。これについて、私の率直な見解を、これから披瀝してみたいと思います。

960万平方キロメートルの面積。これは、ヨーロッパがとっぷり入ります。9億7千万の人口、世界人口の約4分の1、これを擁する中国。しかも現在発展途上国の先頭に立つことを宣言している。この中国がどうなるかということは、世界政治の動向に決定的な影響を及ぼす。これは、否定できないと思う。その中国の将来を規定するいろいろな要件があるでしょう。日本と中国の関係はどうなるか。中国とアメリカの関係はどうなるか。あるいは、特に中・ソの関係、これがどうなるだろうか。今、ちょっと険しくなっています中国とベトナムの関係はどうなるか。これらの要因が中国の将来に影響を与えることは否定できません。

しかし私は、これは外的要因であって、短期的にみれば、重大視しなければなりません。結局は、それらの外との関係を中国がどう受けとめてどう処置するか、ということにかかってくるわけで、外因も無視できないが、中国の遠い将来を規定するものは内因にある、国内の条件にある。

即ち、中国社会が推移していくなかで、中国民衆自身が自分の運命を決定する。こう見なければならぬと思う。中国の社会といっても、それは抽象的なものではなく、あります。9億7千万の人間がその中で生活している中国。したがって、中国がどうなるかということは、中国の民衆がどう動くかということ、外からのいろいろな問題、国内のいろいろな問題を受けとめてどうするか、ということだろうと思う。

中国の民衆を無視した、あるいは、それを軽視した、中国の将来というものにはありえない。しかし、その中国の民衆は、長い歴史を背負っている。彼らの過去が良かれ悪しかれ、歴史がどうであれ、それを背負って、現在生活している。その歴史は、長いあいだに民衆の中にしみついている。したがって、中国社会がどうなるかを見る場合に、大衆的な観点、民衆がどう動くか、彼らの歴史がどのように彼らの中で働くか、歴史的観点、この二つを無視することはできない。

歴史を断ち切って、過去を無視して、現在のみを語るのは、非常に危険である。また、民衆を無視して、ただ一部の要人、指導者の言動だけで判断するのも非常に危険です。

そういう意味で、中国の歴史と民衆、その観点から中国の将来を判断しなければならない。

さしあたり中国は今、社会主義をとっている。したがって、今後がどうなるのかということは、中国社会主義をどうみるか、中国社会主義の将来はどうなるか、ということになると思う。

ところが、中国の社会主義をみる場合には、今まで誰がどのように指導して、それを民衆がどう受けとめて、現在の社会主義を築きあげたか、現在どうなのかをみななければならない。

そこで、最近50年の中国革命の歴史をふり返る時に、現在の中国社会主義をもたらしたものの、築きあげたものは、毛沢東に指導された中国共産党と中国人民である。これは、何人をも否定できない。好むと好まざるとにかかわらず、これは現実否定できないものである。

したがって、中国社会主義の特質は何か、それがどうなるか、ということを探るためには、その指導思想である毛沢東思想というものの内容的な特徴をつかまなければならない。理論のうえで、また、実践のうえで、どういうふうに指導してきたか、またそれを民衆がどのように受けとめてきたか、をみななければならない。

これから、その点についてずっと古いところから申しあげますけれども、

昨年夏頃から『北京の春』といわれる（これは、プラハの春になぞらえたわけですが、必ずしも正しいとはいえませんけれども）従来の毛沢東思想に対する批判運動めいた動きが出てきている、いわゆる批毛運動の傾向を一面でもってきて、大いに壁新聞で賑わされている。これをどう受けとめるかは、将来をどうみるかにかかわってくる。したがって、過去のことを申しあげますが、これは同時に、現在の問題と強くかかわりあいをもっていることを念頭においていただきたい。

それから、我々が中国のことを学ぶのは、日本人として学ぶのです。それと引き合いに、日本はどうなのか、ということと常にかかわって問題をみななければならない。そういう意味で、直接日本のことには触れませんが、これから申しあげますことを皆さんの周辺で起きているいろいろな事象、類似の事柄と対比して、それを頭のどこかにおいてお考え願いたい。と申しますのは、現在の中国社会主義、これは毛沢東思想が一貫して形成されたものである。ところが、その毛沢東思想というものについて、日本では多くが誤り伝えられている。それは、毛派といわれる人達の誤った伝え方、誤った行動、これが中国を誤った形で把握させている；と思います。

我々が中国をみる場合には、理論だけでなく、実際にみなければならない。ところが、毛沢東がいろいろと、書いたり語ったりしていること、これは、実践の記録です。我々が実践とかかわりないことをよく難しい言葉を使って論文を書く、そのようなものではない。

実践の必要に迫られ、その実践の結果の総括として、書いたり語ったりしている。したがって、毛沢東選集五巻のすべては、これは実践の記録としてみていいのです。

その毛沢東の書いたもの、語ったことがらをみてみますと、非常に特徴がある。（これから申しあげますことで、それぞれ、どういう論文のどこに出ているということ、私自身は根拠をもっておりますが、時間の制約がありますので、その出典は申しあげません）

まず、毛沢東の論述や談話の中で、至るところで中国の歴史が引っ張り出

されている。

史記から左伝、論語、孟子、あるいは、水滸伝、西遊記、三国志演義、紅樓夢から西遊記に至るまで、史書や経書、兵書、小説、いろいろな古典、書物から引用がなされている。このことは、非常に重要なことである。とにかく、社会主義の文献といえば、外国文献からの引用が多いのです。マルクスがどう言った、レーニンがどう言った、ほとんど引用文で埋められている類が多い。

毛沢東の論述、談話をみますと、中国の史実、古事の引用はいたる所に見受けられますが、マルクス主義の古典からの引用が案外に少ない。このことは、毛沢東がマルクス、レーニンなどの古典をあまり読んでいないからかという、そうではない。中国の史実を多く引用し、特に、民間伝承、民間で伝えられるいろいろな史実や古事、武勇伝が引っ張り出されている、ここに一つの特徴がある。古来、数百回に及ぶ大小の農民反乱、農民戦争というものが起きている。その中にはいろいろな武勇伝や変幻自在・奇想天外な戦い方やいろいろな故事がある。それらの民間に伝わっているもの、これをいろいろな所で引用している。これはどういうことか。

皆さんが、ある一つの戦争や事件の意味を考える場合に、ロシアやドイツやフランスで起きた事例よりも、日本で起きた事柄を引例されると、身近に感ずる。演劇で入りが少なくなると忠臣蔵をやる、あるいは、佐倉宗五郎の義民伝、あるいは、河内山宗俊の物語、本当か嘘かは別として、なんだか身近に感じて血をわかすわけである。

そういう民間伝承の引用、これは、毛沢東がそのような古い中国の歴史に詳しくたことは勿論ですが、それだけではなくて、そうすることは、毛沢東の言おうとしていること、これが民衆に身近に感じられる、血の通ったものとして受け取れる、民衆はそれを自分のこととして受け取る、そういう意味を持っていると思う。

しかも、その叙述、その語り方、あるいは書き方が非常に易しい。いや、易しいというよりは、民衆の言葉で語られている。

『矛盾論』、『実践論』、『人民内部の矛盾を正しく対処する問題について』、『人間の正しい思想はどこから来るのか』。これらは、毛沢東の『哲学四編』であります。哲学の本というと頭が痛くなる。これが、いろいろな事例を引いて、たやすく、民衆の言葉で、語られている。これは、非常にたやすいことのようにですが、難しいのです。日本では、ほとんどの人がそういうことはできないであろう。これは、常に自分が民衆の中におり、自分に民衆の感じ方が身についていなければできない。そして、常に実際的に物事を語り、書いている。全編実践から離れていない。無駄な論議をしていない。実践から出て直接実践に結びつく語り方、書き方をしている。

一方、毛沢東は共産主義者ですから、共産主義の普遍的真理というものを、これは中国にも適用できるという確信のもとに自分の思想を編み出したのですが、マルクス主義とか、レーニン主義とかの古典からの引用が不思議に少ないのである。彼は、マルクス主義とかレーニン主義というものは公式ではない。(いろいろ命題というものがあります。どうなればどうなる、どうすべきである、という諸国人民の実践から出たところのひとつの結論) 結論としての公式的命題にあてはめるといって、公式主義を排撃している。極力排撃している。こういうやり方は、それこそマルクス主義に背くものだ、こういう者は、革命の隊列にいる資格はない、といっている。問題は、マルクス主義の「立場・観点・方法」、いわゆる、ものの見方・考え方なのだ。彼は、マルクスやレーニンの言葉を引用する場合にも、マルクスがこう言っているから正しいという言い方はしていない。ある人たちは、行き詰まると、マルクスがこう言っているということで、こけおどして相手を屈服する。それを認めないと、マルクス主義に反するものだとする。彼は、そういうやり方はしていない。そういう社会主義の古典を引く場合でも「マルクスはこう言っているが、果して正しいか」と設問している。設問していない場合でも常に、正しいかどうかを自分の頭で考えるという姿勢を忘れてはいない。

マルクスはこう言っているけれども、中国での事物の発展はこうなっている。だから正しい。もしも、現実に適合できなければ、マルクスも含めてこ

れをとり入れる必要はない、といている。中国の実際の状況を見て、自分の頭で考えて、これはどういうふうになってゆくのか、その場合どういう立場で、どういう見方で、どういうふうにやってゆくか、をきめる。そのさい、人間の眼力は限られているから、科学の実験でも顕微鏡が必要だったり、あるいは、望遠鏡が必要だったりする。M. L主義というのは、そういうものなのであり、道具なのである。何事もそれらをどうするかということは、自分達がやることなのである。

つぎに特徴的なのは、現在、中国でいろいろなことが行なわれ、中国社会主義の支えになっておりますが、それらが、中国の過去の史実と非常に似ている、それを継承しているということです。しかも、この場合に、過去を称えて今を貶すようなことではなく、過去の悪いものは悪いものとして、これは捨ててゆく、いいものだけを採ってゆくというように、批判的に継承している。

例えば、中国には、ずっと古い昔から民族が理想社会としている、ひとつの社会像がある。いわゆる大同社会である。これは、『礼記』の『礼運篇』に出て以来、太平天国では『原道醒訓』という文献の中に出ております。戊戌の維新をやった康有為、これも『大同書』というものを著わしている。孫文も『三民主義』の中で大同の社会というものを理想としている。孫文は、その頃ちょっと共産主義というものをかじっておりましたから、三民主義とは大同主義であり、共産主義であるというような言い方までしている。

毛沢東自身も『人民民主主義独裁について』という論述の中で大同という言葉を使っている。これは、本来ユートピア社会なのです。空想的な理想社会なのです。康有為までは明らかに一つのユートピアにおわった。孫文の時には少し、これが実現の経過を考えましたけれど、結局は空想社会主義に終わっている。

毛沢東は、これを空想社会に終わらせないで、これに到達するにはどうすべきであるかという一つの科学的解明を与えている。過去の中国の民族が古くから世の中はこうありたいと夢んでいた理想社会像をいかしながら、それ

を科学的に立てなおしている。

また、いろいろな戦争の中で、特に阿片戦争以後百数十年来、国内の土豪劣紳・地主に対して、あるいは、国外からの侵略者に対して、民衆は自分ではいろいろな知恵を凝らして、いろいろな闘い方をしている。そういう神出鬼没というか奇想天外な歴史上の戦い方を、毛沢東は漏れなく学びとっている。そうして、いわゆる彼の「戦争の芸術」というものを創り出している。戦争に「芸術」という言葉を使うことは、どうかと考えられましようが、彼の立場からいうと彼の戦争は正義の戦争でなければならぬし芸術的でなければならぬのです。人間がピアノを弾く場合に、十本の指が絶えず、自分の中枢神経の命ずるままに自由に動き、そこに一つのハーモニーを創り出すようではならぬ。過去のいろいろな戦い方をただ取り入れただけでなく、ナポレオンやアウゼビッツの軍事理論なども参考にして、一つの人民戦争の理論・戦略・戦術なかんづく遊撃戦争の戦術・戦法を編み出している。だから、それらは、彼の小さな頭の中から出たのではなく、過去の民衆が戦ったそれを漏れなく取り入れうるものは取り入れているというところに民衆自身の戦いとなり、そこでこそはじめて「人民の戦争」・遊撃戦争というものができるのである。

また、現在人民解放軍の他に、中国には民兵、自衛隊というものがあるが、これらには、『礼記』にもありますが、近くは太平軍の『有事に兵となし、無事に農となす』（事が起こらないときには耕し、ことが起これば、これが兵隊になる）、いわゆる太平天国の「農兵制」を学び取り入れている。

また、人民解放軍というのは、世界で稀に見る「人民の軍隊」であるといえる。そうするために、毛沢東は、「三大規律・八項注意」という厳しい軍律を課した。民衆をなぐったり、あるいは針一本、糸一筋かすめてはならない。婦女をからかってはならないなど、いろいろと厳しい戒律を課しておりますが、これは、その形式と内容において、太平天国の太平軍の「モーゼの十戒」を儒教的にやきなおした「十款天条」、その他の戒律に非常によく似ている。

また、後にも触れますが、中国の今の社会の基礎は人民公社です。中国が

どうなるかということは、人民公社がどうなるかということになると思います。その人民公社は、太平天国の「郷官」制度を取り入れています。その他、いろいろな農民の慣行、例えば「郷約」（これは、日本でいえば名主の制度）、「甲」・「閭」（部落会とか町内会、隣組）、その他「吃合夥」（いろいろな飲み食いの寄合）、「廟会」（縁日）、「集市」（いち）など、そういう昔からの中国農村のしきたり・慣行・制度というものをできるだけ取り入れ、これに社会主義の魂を通す。9億7千万の民衆が本当に社会主義を理解するためには、こういったやり方以外に方法はないのです。そういうことから、中国の過去のいろいろな歴史的な事象や光栄ある革命の伝統を正反両面からみて引き継いでいる。

ところが、過去の革命というものは、「易姓革命」といわれるように、絶えず失敗しているわけです。阿片戦争以後の革命も全部失敗している。それはなぜか、ということまでこれを批判し改めてゆく。

また、過去にはいろいろなすぐれた歴史的遺産がある。日本などでも今、興味をもたれてきていますが、いわゆる漢方薬、漢方医など確かに遅れているが、長い間中国の民衆がこれによって生きてきた。それにはそれなりの存在価値があるはずなのだ、ということまで西洋医学もやらなければならないが中国の医学もやらなければならない。「中西結合」、単に結びつけるというのではなくて、漢方医は西洋医学に学んで自分を進歩させてゆく、また、西洋医学者は西洋医の欠点をこの中国医学に学んで改革できるものは改革してゆく。また、演劇でも新劇も結構だが中国の古くからの旧劇「京劇」、あるいは地方劇の「粵劇」、その他「秧歌」（農村の田植え、収穫の時の踊り、寸劇）そういうものを十分生かして民衆の文化を新しいものと結合し改革してゆく。あるいは、生産の方法を見ましても、この100年来中国に入ってきましたヨーロッパ流のいわゆる近代的生産方法、これも大いに取り入れなければならないかもしれませんが、古くからやってきた在来の生産方法も、やはり結合して「土洋結合」でやってゆく。

50年来、あちこちで土地改革が行われました。地主の土地を没収して農民

が耕す土地をもつ、その後では、これを集団化する。これもまず法律をつくってこうやれというやり方にとらない。日本の戦後の土地改革は、まず法律を制定して、上からの命令でやった。中国ではそうではなくて、民衆が自分の力で土地を取り返す、したがって、そこにはいろいろな行き過ぎや、誤りもある。毛沢東は、ある文章の中で、農民の闘争の中には、行き過ぎや誤りもあるが、しかしその行き過ぎや誤りがどうして起きたかをみると、それだけの理由がある。強引な悪質地主のもとで、そういう行き過ぎがたまたま出てきている。農民全体の動きとしては寸分の誤りもないと言っている。農民の自発的な動き、それを支持したうえで、誤りを是正するように指導している。昔から、農村で自分達の労働力の不足、あるいは、役畜や農具の不足を補うために、いわゆる「ゆい」、共同で労働するしきたりがある。そういうものを十分取り入れてどういうふうにして皆が一緒に集団労働をやってゆくかという、農民の最も親しみうる歴史的なやり方を尊重し、それを矯め直して民主的にしていくという、方法をとっているわけです。こういうふうに見てきますと、現在の中国というものは、毛沢東がいうように、民族的な特徴と結びつけ、民族的形式を生かした現代社会でなくてはならない。

民族的特徴を無視し、民族的形式を通じない、国際主義というものは、空虚なものである。これは、国際主義というものを知らないものである。民族的形式のなかに、国際的な内容をもつようにし、それが国際的に融合するところに本当の国際主義があるので、内容的には、国際主義、形式的には民族主義、ここに初めて国際主義と民族主義の統一がある。そうするためには、歴史の上では、良いこともあったであろうし、悪いこともあったであろう、その歴史的事柄の中で、これはどうにも使いものにならない、歴史のうえで結局悪い影響を及ぼしたのなら、これを「滓」として捨て去る、そうして、精華を吸収してゆく。外国のものを取り入れる場合にも、ちょうど我々が物を食べるのも同じであって、物を十分咀嚼する、そして胃液や唾液や腸液を出して、これを栄養分とそうでないものに分けて、粕を排泄し精華を吸収してはじめて成長しうる。とかくモスクワ留学生などは、いわゆるソ連のや

り方・理論・公式というものを引き写しにしたがる、これを「洋八股」として排撃する。これは、それこそマルクス主義に背くものだという事なのです。

だいたい毛沢東の思想の中にこういう特徴が見られるし、現在のいろいろな事象の中にそれがあらわれている。

では、次に毛沢東はどのように、マルクスの立場・観点・方法というものを中国に適用していったのかをみましょう。

私は昭和14~16年、というと1939年から41年頃中国に居りましたが、その頃八路軍とかいうものがどえらい強いそうな、大きな勢力を張ってきているということぐらいはわかりましたが、龐大な人口を擁するあの中国を社会主義にもってゆくようなことは想像もできなかった。あの民衆が社会主義なんてわかりうるだろうか、これは私自身が、要するに、自分の頭の中に社会主義というものを教条として引き写しで理解していたからだと思う。

では、どういうふうにして、毛沢東は社会主義を中国に適用していったか。中国で20年代中国共産党が生まれて革命を指導し始めました頃、中国は日本をはじめとする強国から租界やいろいろな「特権」をもって侵略を受けていた。国内では、地主がまだ大きな力を持っていて、蔣介石を頭とする「四大家族」に支配されていた。この中で、民主主義革命をやっていく。それには、やはり労働者階級の指導がないとできない。これは理論のうえでもそうですが、阿片戦争以来孫文に至るまでの民主主義革命がみな失敗している、これは一体何故なのか、ということからもでてくるわけです。つまり、プロレタリア階級の指導が必要だということなのですが、では、中国に革命を指導できるプロレタリア階級はいたのか。当時、20年代に労働者がいたことはいた。当時人口が4億といわれましたが、プロレタリア階級といえば、近代産業のいわゆる組織された労働者、それを純化したものがプロレタリア階級だと思うのですが、その近代産業の労働者は、20年代に250万から300万であったという、全人口の0.05~6パーセントぐらいである。これが40年代になってもまだ、400万ぐらい、中国が解放されて中華人民共和国をうちたてた直後におい

ても700万ぐらい、そういう意味では、社会的に非常に遅れていた。その250万そこらの近代産業労働者、これは多くは、中国の「四大家族」の官僚資本や外国資本の支配する企業の中で働いていた。したがって、非常に戦闘性は強かった。しかし、資本主義の歴史というものをほとんど経ていませんから、訓練されていない。したがって、戦闘性は強いが、文化水準というものは非常に低い。歴史が浅い、そして量的に少ないという欠陥を持っていた。したがって、これでどうやってプロレタリア階級の革命隊列を築きあげてゆくのか。中国内の民衆を立ち上がらせなければ、革命はできない。250万で立ち上がらせうるか、という問題である。

中国の社会は、毛沢東の言葉を借りますと、両端が非常に小さくて中間が大きな社会である。大資本家階級や大地主というものも少ないが、いわゆる労働者階級というものも少ない。農民・手工業労働者や都市小資産階級などの組織されない中間階級というものが非常に大きい。そこで、どうやって革命の隊列を引っ張ってゆく機関車をつくりあげてゆくか。多くの場合、プロレタリア階級というものは、これも非常に公式的、観念的に把握される。あれは労働者だからプロレタリア階級だと。必ずしもそうとはいえない。労働貴族というのがありますから。毛沢東はプロレタリア階級というものを観念的に概念をあてはめて、あれは良いこれは悪いというように取捨選択をするようなことはしなかった。近代産業労働者は250万そこらだけれど、非常に戦闘性が強かったが歴史も浅いし訓練も経ていない。そして、中間が非常に大きいから、その影響を強く受けている。そこで中国の労働者階級にはどういう欠陥があるのか。また、社会の中間の大きな胴体の大部分を占める農民、これは労働者階級ではないが、大きな革命的エネルギーがあることをみのがさなかった。事実、農村の至る所で火を吹いているのは彼らの闘争である。こういうように、中国のプロレタリア階級とそれにちかい民衆の長所、短所をみきわめて、とにかくプロレタリア階級を結集しなければならない。結集したうえで、それを指導階級たりうるように教育してゆく、鍛えてゆかなければならない。そういうことで、中国共産党が成立して以来現在まで、絶えず

党内闘争が行われてきたわけである。

また、かつて紅軍といい、現在人民解放軍といっている軍隊、これは人民の軍隊であり、革命の最も精鋭な武装装置でなければならない。したがってそれは、徹底したプロレタリア階級の純潔性を持たなければならない。

ところが、その時の紅軍の大部分というもの、かなりの多くが貧農あるいは雇農、游民（ルンペンプロレタリア）もかなり多かった。非プロレタリアが多いからだめだというのではなくて、やはりその長所、短所を見極めて（ルンペンプロレタリアートは非常に戦闘性に富み革命性があるが破壊性があり組織性がない。したがって、流寇主義・無政府主義・地方主義・冒険主義・ひとりよがりの気持というものがでてくる）、それにたいして、「三大規律八項注意」といった戒律をもうけて、その中で教育してゆく。思想教育をやってゆく。中国共産党が成立してから、絶えず党内闘争が行なわれてきた。それは、表面的には、指導権の争いのように見えますが、実は中国プロレタリアートの長所は何か、欠点は何か。その欠点を矯め直すために、どうしても党内闘争、路線闘争というものをやってゆかなければならないということです。その中には、表向きには路線闘争のようで私心から出てくるようなものもありましたが、そういうものは、その闘争の中でずっと排除されてきているわけです。

そういう社会の特質から、農民の中に最も大きな革命的エネルギーをみとめ、それを吸収してゆくということに全力が注がれた。したがって形の上では農民革命の形をとった。しかも、プロレタリア階級の指導というものを教条主義的に受け取るか、中国の実際に合わせて実際に照らしてやってゆくかで、20年代後半から30年代前半にかけて苛烈な闘争が行われました。

農民の革命というもの、農民闘争というものはプロレタリア階級の指導がなければ失敗する。しかし、農民の闘争が労働者の闘争を上まわるからといって革命を不利に導くことはないという毛沢東の見解に対して、プロレタリアートがこんな状態なのに、農民がどんどん立ち上がって闘争を起こして一体どうなるかということで、教条主義的なモスクワ留学生あがりこれが反

対した。しかし結局「左」翼日和見主義に陥って、排除されていったわけです。

プロレタリア階級以外の雑多な、特に農民を主とする非プロレタリア的な要素がたくさんある。だから教育が必要なんだ。思想教育が必要なんだ。政治教育が必要なんだ。階級矛盾が党内に反映して、党内闘争も避けられないのだ。このようにして、プロレタリア階級の立場というものを貫いてきた。

次にものを見る見方、ものを処理する方法の問題です。

彼は、抗日戦争の開始直後の1937年7～8月時局のもっとも重大な頃、非常に重大な局面に際し哲学どころじゃないという時に、彼は『矛盾論』『実践論』というものを抗日軍政大学で講義している。それは、民衆にわかるように非常に平易に話されている。これは、どういうことか。

哲学というものは、一部の知識分子だけがやればよいという問題ではない。中国をどう建て直すか、中国の民衆がやらなければならないものである。中国の民衆が矛盾論、実践論というものを身につけ、正しいものの見方、考え方というものをうち立てなければそれはできない。民衆自身が、どうものを考えてどうやっていくか、正しい知識・方法というものが民衆の身につけば、そこではじめて人民戦争にせよ、遊撃戦争にせよ、より大きな威力を持って抗日戦争に勝利できるわけです。民衆自ら自分の頭でものを考える一つの導きとして彼は哲学を話した。民衆の哲学にした。いわゆる大衆化をやった。これは、通俗化という意味ではありません。人にわからないような言葉を使うから高尚だなどとはいえない。そうやってはじめて「戦争の芸術」が生まれたのである。

1938年頃、最も戦争がこれから対峙状態、膠着状態に入ろうとする時、日本軍が武漢まで攻め入りかなり奥地にまで入った頃、彼は『持久戦について』という論文を書いている。その前後に『抗日遊撃戦争の戦略問題』とか、『戦争と戦略問題』とか、いろいろと数編の論述で戦争を指導しておりますけれど、この『持久戦論』が中国民衆に中国は早く勝つことはできない、なぜ早く勝つことができないのか、負けるのか、負けることはありえない、何故負けることはないのか、何故長く戦わなければならないのか、どうやって長く

戦ってゆくのか、そうやって戦っていけば、何故勝利できるのかということ  
を明確に述べている。そして、その後8年間、『持久戦論』に書いてあるとお  
りに戦局が展開している。

日本に桜井忠温という軍人で戦争小説を書く人がいた。この人が『持久戦  
論』のガリ刷りかなんかを見て舌を巻いたという。

戦後においてみても、『持久戦論』に書いてあるように戦局が展開した  
過程が、まるで、毛沢東の指令によって、日本軍が動いたようになっている。  
ということは、ものの考え方、方法というものがいかに客観的に正しかった  
かということが実証されている。その間には、いろいろと奇抜な遊撃戦争が  
展開されます。太平天国では、「螃蟹戦」(中央を突破すると見せかけて、横へ  
いって包囲する)、あるいは、「百鳥戦」(これは「麻雀戦」ともいう、百羽の  
雀を一網打尽にするには、どうすればよいか) というような、いろいろな戦  
術戦法をとり遊撃戦を主としている。遊撃戦争というものは、非常に難しい  
わけです。ゲリラですから統制がとりにくい。それを駆使して、『持久戦論』  
に書かれたとおりに、戦争が推移している。これだけで、認識論、方法論と  
いうものが、いかに正しかったかということが、実証されていると思うので  
す。

また、前にも言いましたように、中国は中間の太い社会である。したがっ  
て、労働者階級、農民は勿論、それ以外できるだけ沢山の中間の人を結集し  
て戦わなければならない。あるいは結集して革命をやらなければならない。  
統一戦線というものですが、毛沢東の統一戦線の政策というのは、これもま  
た芸術的です。単なる手練手管じゃなく、論理的に合理的にこれが展開され  
て、いうならば、皆が統一せざるをえないようにもってゆく。その方法とし  
ては、いくつかの統一戦線戦術の原則というものをうちだしている。それぞ  
れの諸階級の間には矛盾がある。階級内部にも矛盾がある。矛盾を利用して、  
多数を獲得して少数に反対し、各個撃破する。敵、味方をはっきり区別して、  
そのうえで、矛盾を利用して敵をできるだけ小さく分化してゆく、そして味  
方を最大限に大きくしてゆく。闘争もすれば団結もする。統一するというこ

とは、団子になることではない。闘争を通じて団結の目的を達する。また、闘争というものは、有利であり、道理があり、節度がなければならない。道理がなければ、人を引き付けられない。戦う場合にも。有利でなければならないし節度がなければならない。これは、現在の北京でのいろいろな動きでも、わかるでしょう。鄧小平は、これを、よくわきまえている。いつまでも、ガタガタやればいいというものでもない。

道理があるから、戦えば勝つ、また団結できる。有利であるから団結する、有利な限りにおいて戦う。そして、節度をもって、まだ戦う余力があっても、この辺が最もいいところだと思えばやめる。こういういろいろな戦術原則がある。これを、弁証法に従ってうち出し、それを自由に駆使して、蔣介石まで含めた、いつか裏切るということを見込しながらも、これを含めた統一戦線を形成した。農民は勿論のこと、中小ブルジョアジーといわれる知識人や都市の中間階級、それから民族資本家階級、大ブルジョアジーの中でも抗日に賛成する人は、これを取り込んだ。それだけに、プロレタリア階級が指導権をきちっと堅持していなければ、もみくちゃにされるわけである。それだけに、また、ものの見方、考え方のしっかりした指導をやらなければならないということになってくるのである。

また、次にこういうことができたのは、中国の民衆が非常な変わり方をしたということです。

毛沢東は、上部の幹部には、非常に厳しかった。高い地位のものほど、厳しかった。これは、その影響が大きく及ぶから当然のことでもある。大衆には、非常に寛大であった。

いろいろな文献の中で大衆をどうみているか。党と大衆の関係をどう考えているか。歴史の上でも現在でも大衆の知恵と経験と労働がすべての富と文化を生み出してきているのだ。大衆には無限の創造力がある。大衆がいなかったならば世の中はない。その創造力は、社会主義社会では無限の社会主義的な積極性になる。歴史というものは人民大衆が創り出すものである。大衆は大地であり、党は種子だ。党は、大地に根をおろさなければ成長できない。

党と大衆は、水魚の関係にある。あるいは、水と泳ぐ人の関係にある。泳ぐ人は党であり、水は大衆である。大衆は、我々の審判官であり監督者である。そして、『愚公、山を移す』の中では、大衆は天帝であるといっている。絶対である。日本でも、多くの政治家なり革命家が「大衆、大衆」という。大衆を軽蔑しながら大衆という。大衆を利用するために。毛沢東は、大衆は絶対である、だから、大衆に逆らってはいけない、軽蔑してはいけない、恐れてもいけない、大衆から離れてはいけない、といっている。もちろん、大衆の中には誤った者もいる。が、多数の大衆というのはいいい人なのだ。多数の大衆の進む大きな方向に誤りはない。

したがって、ここに大衆路線がでてくる。毛沢東が大衆を語っているのは、具体的で感情を一つにして語っている。徹頭徹尾、大衆の中に入り、大衆の中から出る。これに徹底している。では大衆追随になりはせぬか。大衆路線というのは、表面的に大衆全体の動きをみて、それにべったりついてゆくことではない。大衆にもいろいろある。大多数の大衆はいい人であって、その進む方向は常に正しい。その大衆の中には、一部の先進的な部分がある、遅れた部分もある、中間的な部分もある。その先進的な部分、これは多く下層にある。貧農とか雇農とか、あるいは労働者の下層にある。その先進的な部分をみて、大衆の本質を見出す。これが党の役目だ。これに熟達しなければいけない。大衆の上にあぐらをかいてはいけない。大衆を権力であるいは理屈で圧服しても、必ず失敗する。大衆の気持と一つにならなければならない。

大体、共産党員の多くは、大衆の言葉を語っていない。大衆と気分が一つでない。言葉自体が違う。言葉自体が違えば、「俺は大衆の味方だ、味方だ」といっても、大衆にはよそ者でしかない。これは非常に重要なことだと思う。

大衆がまだ自覚していない時に無理に引張っていこうとすれば、これは「左」翼日和見であり、冒険主義である。失敗する。辛抱強く大衆の自覚を待たなければならない。だから、大衆について行くのではなく、大衆を教育するのである。先進的な部分を大きくして、教育してゆかなければならない。

大衆は必ず立ち上がる。それまで待たなければならない。それを待ちきれ

ずに引張ってゆこうとするのが、これが冒険主義であり、「左」翼日和見である。また大衆の恐れるようなことを言いさえすれば、革命的だとおもっている、こういう連中は革命の隊列の中に置く必要はない。また、先進的部分をはじめ大衆が前へ進もうとしているのに、後からよちよちついて行くのは、これは右翼日和見主義である。これは、大衆の足を引張るものである。ではどこで、冒険主義にもならないし右翼日和見にもならないような指導をするのか。だから、大衆に学んでその本質をつかむことに習熟しなければならない。大衆から離れてはならないからといって、火急の場合、緊急な場合、あるいは、大衆がまだ自覚していないけれども国の運命にかかわるという時には、そのための教育をしながら、毛沢東が自分の責任において、或る決定を下している。

三つほど、例を掲げますと、1934年から抗日統一戦線をうち立てるために、江西省から陝西省の延安に「大長征」をやった。これは、党の運命をかけた、一つのいうならば賭け事とみれますが、彼には彼なりの理論的な根拠と見通しがあった。この「大長征」によって、当時黨員が、数10万おそらく3,40万じゃなかったかと思いますが、それが数万に減った。4~5万ぐらいに、減った。形だけから見ると、大きな冒険なのです。ところが、長征の過程で大衆を教育し、その後、黨員は従来の数倍、10数倍にふえるし、抗日の気分は盛りあがり統一戦線をうちたてた。こういうことは、大衆の思いもよらぬことです。

二つ目は、1947年、抗日戦争勝利後、国共内戦で蒋介石が陝甘寧辺区にたいして重点的な進攻をかけた際、毛沢東はその中心延安を放棄した。これには皆びっくりし反対も起きた。ところが、毛沢東の考えでは、戦争というものは土地でけりがつくのではない、人間でけりがつくのだ。延安を放棄しても、延安の教育を受けた民衆がしっかりしてくればいい。これは、大きくその後の人民解放戦争の展開に有利に作用した。

その次が、1972年、アメリカ大統領ニクソンの訪中をうけいれた。アメリカ帝国主義といえ、中国の最も強大な敵である。これには、中国の民衆も

党員の多くもびっくりした。今までいちばん攻撃してきたアメリカの大統領をよんで毛沢東自ら会った。ただ、おまえ達民衆はわからないのだというのではなく、その前後には『重慶交渉について』という論文を大衆に学習させた。重慶交渉では、抗日戦に勝利した直後、国民党と共産党が一緒になって新しい中国を作ろうとして、あるいは無駄かもしれないが思いながらも誠意をもって国民党側と交渉して、そして、国民党の実態を大衆の前にさらけ出した。ニクソン訪中の受けいれも、必ずしも全面的にニクソンを信頼しているわけではないが、むこうの出方ではこちらも誠意をもって国交回復をしてゆくのだと。これなどは、大衆の思いもよらぬことだったのですが、それには、国際情勢からこの時、やらなければならない、それなりの論拠があった。

大衆がそれを理解するような手段を考慮しながら思いきった政策をやる。これは、やはり大衆追随でない証拠だと思います。

こういうようなやり方で、中国の社会主義が成り立ってきた。いうならば、中国の民衆を導いてきた毛沢東思想というのは、民衆に最も身近に感じられる、民衆と血の通った歴史的な伝統、遺産というものを十二分に受け継いで、それを批判的に摂取して、そして民族的特徴と結合し民族的形式をもった、中国社会主義となってあらわれている。その思想体系が毛沢東思想だ。そして、現実に、さまざまな「新生の事物」というものが、生み出されてきている。そしてこれらのものが、今の中国社会主義を支えているのです。

その最も基礎には、人民公社がある。私は、中国の長い歴史の中で現在ほど中国が統一された時期はないと思う。あの多くの民衆、あの広大な地域、また台湾が残ってはおりますが、このような統一安定の歴史的時期はなかった。今、ぐらつきそうにもない。それは何故か。それは、人民公社という人民が創り出したもの、なじみ深いもののなかに中国社会主義の魂がぐっと貫かれておるからである。

権力だけでは、9億7千万の民衆を圧服できるものではない。私は、中国が将来どうなるかということを決める決め手は、中国民衆だといった。外国

からのいろいろな外的要因ではない。原子爆弾でも9億7千万の人民を皆殺しにすることはできない。占領しても、占領し尽すことはできない。

日本軍がいい証拠だ。あの大きな人民の海の中に溺れてしまった。たとえ力で一時的に抑えても、彼らを圧服しつくすことはできない。

その中国民衆が今、人民公社を足場として自分のゆく方向を見極めている。現在、中国があのように統一しているのは、一口でいえば、人民公社およびいろんな「新生の事物」が支えているからだと思う。これは、毛沢東思想に導かれて民衆自ら創り出したもの、上からこうしなさいといわれてつくったものは何もない。民衆が創り出したものであるから、民衆には自信がある。自分の先祖がやったことを近代化、現代化していくので自信がある。だから、民衆に国家の方向がわかる。どうやれば、いいのかがわかる。

党は、中央委員会、政治局からずっと末端まである。ピラミッド型にある。政府は、国務院を頂点に各級の革命委員会があって、人民公社の生産隊が末端にある。軍は、軍事委員会のもとに各地にそれぞれの部隊があり、末端まで民兵組織、自衛隊の組織がある。それに、ここでいう民衆というのは、孫文が嘆いたように「ばらまかれた砂」では力は持ちえない。中国の民衆は組織をもっている。あるいは労働組合、あるいは青年団、婦女会、少年団、文化諸団体それぞれ組織をもつて自分で動いている。それが、ずっと末端まで拡がって、ピラミッド型に民主集中制をとっている。人民公社を基礎とした、党、軍、政、民衆、これがそれぞれピラミッド型にずっと上に積み上げられて、今の中国社会主義の社会機構をつくっている。ここに、中国社会の根強さがある。党、軍だけなら大したことはない。党、軍、政だけならまだわからない。それを民衆が網の目のように裏付け生きたものとしている。

そこで問題は、毛沢東の晩年にある。

いわゆるプロレタリア文化革命の結果、いろいろな弊害、欠陥があらわれました。現在、それを清算する意味で、あるいは矯め直す意味で「翻案風潮」（過去の決定をひっくり返す動き）が出てきている。プロレタリア文化大革命の中で欠陥、弊害が出てきたことは蔽うべくもない。大いに明らかにして

ゆけばいいと思う。またその結果、「四人組」がのさばり出ていろいろと弊害を生み出したことも事実である。

しかし、このプロレタリア文化大革命が始まる当初1966年8月8日に、毛沢東が指導して「プロレタリア文化大革命についての決定」という党中央委員会の決定を出している。これを『十六カ条』という。それを読むと、「四人組」その他のいわゆる投機分子がいろいろとやった弊害というのは全部禁止されている。多数の幹部を無差別に排撃してはならない、プロレタリア文化大革命と生産を対立させて生産現場から離れてはいけない、武闘をやってはいけない等々。『十六カ条』のとおりプロレタリア文化大革命が進められておれば、いわれているような弊害は起きていない。ということは、運動の過程で毛沢東の考えているものと違った現象が部分的に出てきたということ、毛沢東の意思ではなかったということ、即ち、こと志と違った部分的な現象があらわれたということである。

だからといって、毛沢東の責任は免れない。最高指導者しかも四人組の中に自分の夫人がいたのだから指導責任は絶対免れえない。毛沢東も晩年、心身が弱ってきて、十分な指導ができなかった。あっちこっちまわって十分な指導をすることができなかった。いろいろな事情が考えられますが、毛沢東の指導責任は免れない。

だからといって、プロ文化大革命の意義を否定することはできない。プロ文化大革命によって中国の民衆は非常に意識を高め強くなってきている。これを否定することは、現在の中国を否定して何十年前に返すことである。現に、中共中央も否定していない。継続革命を続けながら「四つの現代化」をやってゆくという。第一次のプロ文化大革命は終わったと知っている。第二回、三回が将来あるかもしれないということだ。

私は、これまでの毛沢東の偉大さのために神格化し、毛沢東の欠陥を蔽い隠す必要はない、プロ文化大革命の欠陥がどこからどういうふうにして出てきたか、大いに明らかにする中で、このプラスの面も明らかになってくると思う。しかし、それは私には、今まで申しあげました過去の業績からして、

毛沢東の顔に一つ、二つ「あざ」ができたようなもので、むしろ、毛沢東も同じ人間であった、人にもごまかされ夫人にもごまかされた、人間くさい人間であったとしか受け取れない。だから、鄧小平は、毛沢東について功績が七分で欠陥が三分だというようなものではない、といている。欠点もあるだろうが、それは今後の実践の中で将来明らかになるだろう。1926～35年の党内闘争は党の危機を賭けた闘争だったのですが、その評価は、1945年、10年経った後やっと結論が出たのです。この問題もこれから何年か先、10年か先に明らかになるだろう。

そこで、「四つの現代化」ということですが、現在なりふり構わずというか六面八臂というか大車輪の活躍をしています。鄧小平の残された生涯の政治的課題として、責任をもってやっている。だが「四つの現代化」が毛沢東思想と対立、背馳するものと考えれば、大きな誤りです。

この「四つの現代化」は、毛沢東がまとめていったことはないのですが、50年代後半から部分的にあちこちでやってきたことなのです。そうして、毛沢東の指示を受けて、周恩来が、65年と75年の1月に「四つの現代化」としてうち出した。だから「四つの現代化」は、毛沢東が、いずれやらなければならないが、早くやらなければならないが、内外の事情からそこまで手が及ばなかった、まだ十分に手をつけえず花を咲かせえなかった毛思想の一面であった。今、それを受け継いでやっているとみるのが正しい。

よく新聞などでも、中国は階級闘争から経済建設に移ったという。これは、とり方によっては誤りです。継続革命を堅持しながら「四つの現代化」という経済建設が突出していることは認めなければならない。だが「四つの現代化」即ちこれ革命である。その「四つの現代化」にしたがって、外国の生産技術あるいは管理方法など大いに取り入れてゆくでしょう。

しかし、これは、中国の今までにあったものをすてさったり、木に竹を継いだものにはならない。「新生の事物」の中に吸収されてゆく。最近の『経済研究』の論文などを見ましてもそうです。

したがって今後とも毛沢東思想は堅持されるであろう。

現在、「全是派」(すべて派)と「実践派」とに別れて闘っているようにみえます。そういってもいいと思います。「全是派」というのは、毛沢東はすべて正しい、毛沢東の言ったとおりにやってゆけばいいのだということです。「実践派」は、いややはり誤りもあるのだからこれを客観的に実践を唯一の真理であるかどうか検証する基準としてやってゆかなければならないとするものです。

実践派というのは、けっして毛沢東思想に対立するものではない。これこそ、毛沢東思想なのだ。毛沢東思想が今後堅持されるといっても、50年代、60年代にやったこと、いったことがそのまま今後行われることではない。時代が進み客観的条件が変われば、したがってその形は違う、適用も変わってくる。そこにはじめて毛沢東思想の発展がある。だから今、「実践派」のプロ文化大革命の時期四人組に排撃された人達が復活して、毛沢東思想を全面的に見よう、一言一句ふりかざしてこれを盲目的に行ってゆくことこそ、毛沢東思想に背くものであるといっています。

「四つの現代化」で、外国の新しい技術や方法が、どんどん大規模に採り入れられていきますが、今後どのように従来の中国社会主義の中に根づいていくかということが、大きな課題だと思うのです。

従って結論といたしましては、現代の中国社会主義というのは、中国の長い間、歴史の中で培われた民衆という土壌の中で、毛沢東思想という、伝統的なやり方を革命化してうち出した栽培法によって、枝をはり根をはり葉を茂らせた大樹のようなものだ、土壌を入れ替えることはできませんし、下手に栽培法を変えたら虫がつき枯れてしまいます。よく「中国の毛沢東離れ」ということが言われますが、それは単に現象の一部を見ただけのものである。中国が毛沢東離れをする時は、変色する時であり、中国社会主義が危険に際した時である。

毛沢東思想というのは、毛沢東の名を冠しているけれど民衆の思想になっている。中国民衆が自分達の毎日毎日の生活のなかでのものの見方、考え方になっている。それはプロレタリア文化大革命を通じて非常に強靱になって

いる。勿論こう言いましても、「四つの現代化」がどんどんすすんでいく。歴史というものは、直線的に進むものではなく、ジグザグな形をとる。あるいは、外国の資本・技術に圧倒されて、おやおやという現象が部分的に表われてくるのは免れないと思う。その時には、プロレタリア文化大革命がまた起きるだろう。

プロ文化大革命は、いうなれば、結末があまりよくなかったのでわかりにくいところがありますが、中国が変色しないためのいわば安全ブレーキみたいなものです。

中国の将来をどうみるか。現象的には、非常な変わり方をしてゆくだろう。いうならば、おそるべき強大国になるだろう。それは、ひとつの世界の脅威になるかもしれないが、今まで生み出された中国社会主義のいろいろな事象の支えが健在であり、特に人民公社を基底とする支えが十分であり、その中に摂取されていく限り、今までのコースを急角度に変えることはあるまい。その時にも、中国は大国主義をとらない、覇権主義はやらないという、毛沢東のいわば遺言みたいなものが貫かれるだろう。これを、我々は信頼することができる。毛沢東が大国主義になってはいけないといったのは、中国は全く大国主義になる危険性がないから言ったのではない。事実、中国は大国なんだから、いわゆる自分を戒める意味で自国の民衆を戒める意味で言ったのだとおもう。とかく、経済が発展し軍備も十分になってくれば、思いあがりが出てくる。毛沢東としては、ソ連を他山の石として、ああなってはならないぞという意味で「覇権主義をとってはならない、大国主義をとってはならない」と戒めた。現在、中国社会主義を支えているいろいろな制度の中に、「四つの現代化」が吸収されてゆく限り、この大国主義をとらないという方向を我々は信頼してもいいと思う。しかし、それが幾分曲がりそうになり、我々がはらはらするような時には、中国民衆が再びプロレタリア文化大革命を起こすかもしれない。これはまた結構なことである。こうやって、歴史がジグザグに進んでゆくのではないだろうか。

以上で私の講義を終わります。ありがとうございました。